第３１回みどりの文化賞

市民・女性の視点で
森林づくりを広める

受賞者

池谷キワ子氏（８３才）

（育林業）

１　東京都五日市地域は、今でこそ都心からの移住先の一つとして注目を集める中山間地域であるが、かつては、「五日市」の地名が示すように地域経済の中心として栄えた地域である。文化水準も高く明治初期の「五日市憲法」で知られるように時代を先取りしてきた地域でもあった。（氏の曾祖父の池谷精一氏は同憲法草案の起草者の一員であった）

池谷キワ子氏は、このような地域の一角、養沢地域に昭和１３年に生まれ、４０年前から父親が営む林業を継承した。森林インストラクター、森林評価士、都林業普及指導協力員の資格を取得し、森林・林業の管理・経営の現場に従事するとともに，多くの提言を発信してきている。

２　氏が家業を継承した頃から、材価の下落と伐出費の高騰、このような現状を反映しない相続税評価、度重なる雪害など災害などに苦しんできた。

一方で、氏は、生命の宝庫である森林において樹木の価値や樹木を育てることの意義を広く知ってもらうため、自らの所有森林を一般市民に開放し、また、自らガイドしてきた。

特に、昭和６１年の雪害などを機会に、早くから市民参加による森林整備の重要性を訴え続けるとともに，所有森林を市民グループの活動の場として開放し、３０年近く一緒になって作業をしてきている。

このような取り組みが東京都，ひいては，我が国における市民参加による森林づくりの発展の基礎を築くとともに，市民グループの育成のきっかけとなってきた。

３　氏は、今でも複数のボランティア団体を受け入れ、共働してきているが、中でも「そらあけの会」は、２０年以上継続的に活動してきており、自分たちが育てた木の成長ぶりを見守っている。

４　氏は、育成途上の森林を成人してもお金を稼がない「道楽息子」のようだと評するが、一方で、「誰にも真似のできない人々に住み心地の良い環境を作り出す才能を秘めている」という。自らの肩書き「育林業」には、ボランティアを含めて「伐りたがり」が多い男性とは異なる氏の考え方が集約されている。

森を育てていくためには、森林所有者のみの力ではなしえず、森林ボランティアグループの助けを借りながら、伝統的な林業技術を習得し伝承したいという彼らにベテランの作業員が指導していく環境を整え、さらに作業員も自身の仕事に誇りと価値を見いだすという循環を作り出すことが重要であり、このことを通じ自身も有形無形の励ましをもらってきたという。

５　氏は、自らのお名前の「キワ子」を「木は子」と説明されているが、今でも次世代を担う子供たちや一般市民に対して女性、そして母の視点から貴重なメッセージを発信し続けており，さらなる活躍が期待されている。

（略歴）

１９３８年　東京都西多摩郡旧小宮村生まれ
東京都立武蔵高校，日本女子大学国文科卒　博報堂勤務
１９８０年　父の池谷秀夫氏が経営する池谷林業に就職
１９９１年　池谷林業の経営継承

（公職歴）

日本林業経営者協会理事、東京都農林水産振興財団理事、日本森林技術協会理事、東京都森林審議会委員、エンジョイフォレスト女性林研会長　等

（受賞歴）

２０１４年　農林水産祭（全国林業経営推奨行事）・林野庁長官賞

（主な著書）

『山からのたより－養沢で林業とともに』(株)清水工房　２０２０年

東京多摩地域の地誌，なりわい（生業）としての林業への愛着ぶりが女性、そして母の素朴な言葉で綴られている。長年にわたる市民ぐるみでの植林拡大の努力の貴重な記録ともなっている。